



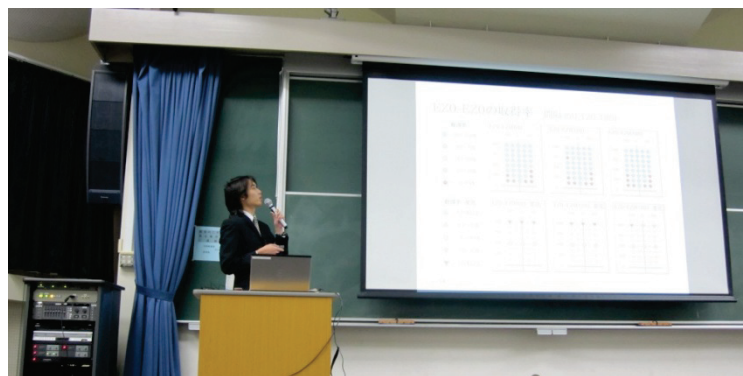
2011年度 インターンシップ報告

スーパー連携大学院コンソーシアムwebニュース
2012年2月15日号

スーパー連携大学院プログラムでは、実際に企業で就業経験をする実践科目として博士前期課程での短期インターンシップと博士後期課程での長期インターンシップ（産学連携共同研究）を必修としている。現在はプログラム受講生の所属大学のインターンシップ制度を利用しているが、将来的にはスーパー連携大学院コンソーシアムで会員企業を中心とした受け入れ先や期間の調整を行うことを検討している。

スーパー連携大学院プログラム一期生である5人の受講生は本年度、それぞれ電気通信大学、北見工業大学の制度を利用して企業等へ2～3週間のインターンシップを経験した。

そのうち、当コンソーシアム会員でもある日本精工（株）でインターンシップを行った栗橋翠さん（電気通信大学大学院情報システム学研究所1年）は、電気通信大学で1月24日に行われたインターンシップ参加学生の成果発表会（※）で発表を行った。



栗橋さんは、今回得られた知見について「手段・方法に自由度がある課題に取り組む中で、高校から大学院まで複数の分野で知識や技術を習得してきたことがプラスに働き、知識や技術の幅の必要性を実感した。また、チームの状況を読み取り、その条件下で自分がどのスキルを発揮すべきなのか考えて取り組むことが重要だと感じた」とした。特に自主的に取り組める研修課題、幅広い知識の必要性は、スーパー連携大学院プログラムが目指す「7つの志」を持つ人材育成に繋がる部分であり、プログラム独自のインターンシップ企画が目指すべき形との関連性が高い。

【写真】発表会会場（上） 栗橋さんの発表の様子（下）

その他の学生の報告発表では、職場の雰囲気を経験できたことに加え、仕事におけるコミュニケーションの大事さを学べたことが成果だとする感想が多く聞かれた。特に情報分野の学生が多いため、他人のソースコードを読む、他人に読まれるソースコードを書く意識についての感想が目立つ。また、事前の予習の重要性を指摘する声もあった。

インターンシップの受け入れ企業に対するアンケート集計結果では、インターンシップの意義として「社会・大学貢献」「企業PR」「求人活動の一環」が多く挙げられた。一方、学生のアンケートではインターンシップ志望動機として「社会体験」「意識向上」が主なものとなっていた。企業・学生ともに、これらの意義・動機が十分に達成されたとする回答が多く、また全ての学生が「有意義だった」と答えるなど、インターンシップに対する高い満足度が伺えた。

このような参加大学でのインターンシップ報告を精査し、今後の受講生へのアドバイス等の対応へ繋げ、最終的にスーパー連携大学院プログラム独自の付加価値をもつインターンシップ制度へと発展させることが望まれる。

（文責：コンソーシアム事務局）

※ 電気通信大学産学官連携センター主催 第87回研究セミナー「産学官連携の人材育成×インターンシップ」 [詳細リンク](#)（外部ページ）